

誰からとなく耳にした事だが、部隊本部には、私の死の報告が通知されていたようだった。

## 二 私の陣中日記

### 医務室勤務

佐賀県 平 田 哲 造

八月〇日、東山の本部より西村の野戦倉庫に配属となり、訓練と作業に精を出すことになった。

ある日、古参兵殿より、いきなりビンタを取られ驚かされた。また「初年兵、集合！」の声で営外に整列、二列横隊で前列は一步前へ回れ右、向き合った者同士の右と左からの對抗試合だとのこと。また内務班では隣にいた古参兵殿から、夜中にはよく鼻をつままれた。いびきが高くて寝られないと。

○月〇日、ある朝の点呼で週番士官より指名され、軍人勸諭の五カ条の一つ「軍人は忠節を尽くすを本文とすべし」の項を全員の前で滞ることなく暗唱して

ホッとした。

○月〇日、将校当番として、一行五人が森林調査かで随行了した時、この将校から「おまえは何処からか」「ハイ佐賀です」「佐賀県人は進取の気性に富んでいるが食いはぐれが多い」と言われた時には「この野郎」と思ったけれどどうしようもなかった。

○月〇日、増城に派遣された時、慰問団が来て、演芸があった時に浪花節の一節で、「トーフ何処行く、わしや医者通い、何ほ医者に通ったとて、元の豆にはなりはしよまい」「これは劇題のサービスで語りますのは……」というのがあった。今でも宴会など時には美声？を張り上げている。

二月〇日、東山の本部に帰る。隊長への申告が終わり、再度隊長室へ。隣の部隊の木工室勤務を命ぜられた。帰還兵殿との交代だった。半年宿舍備品の補修をし、上等兵に進級した途端、黄疸になり四十六日の練兵休。その後衛兵勤務、夜の広東大空襲で第三監視哨の下番哨長で応援に行ったが、谷川君が戦死し、その夜屍衛兵として一夜を明かした。

○月○日、突然呼び出され、「元アルコール工場勤務で医業に詳しいだろう」とかで、医務室勤務を命じられ、貫さん達と共に看護術を見習った。

湘桂作戦に参加と共に、往復四カ月、三水、徳慶、梧州、潯州、白馬干、平安、武宣を往来した。その間、警備隊の指揮班に属して沖隊との連絡命令受領者として午後は設営隊と共に宿舎の割当てをした。引き続き作戦も終わり、十二月末広東へ。神社に参拜無事を祈る。留守隊にて四カ月の垢を落とした。

明けて一月七日、北江作戦へ。永田君と共に源潭墟の鉄道隊での糧秣と病人の連絡所として勤務した。その間、空襲に遭ったトラックのボディの修理をする。ここで同郷の福島君の訃報を聞いた。

五月、英徳へ糧秣輸送。途中何事もなく無事英徳に着き、引き続き黄珠塘へ行き一泊、私は英徳の連絡所にて病人の看護をした。

七月十日、作戦終わり広東に引き揚げる。引き続き竜眼洞へ行き、本隊は作業に、私は隊長の命により付近住民の医療宣撫に従事した。そのための代償として

卵、ニワトリ等もらい夕食の膳に上った。

八月十五日、作業が終わり移動準備中、よその部隊の兵隊が電報を傍受し、戦争が終わったと言う。それからあちこちと回され、落ち着いた所は俘虜收容所。ここでは、作戦中の移動地を記入していた寄せ書きや、日の丸の旗、千人針の腹巻、お守りを燃やしてしまいホッとした。

十月○日、また命令が出る。次は広東の「波八六〇部隊」の倉庫の補修である。赤十字の腕章をしていとお陰で、中国軍人の持つてくる注射液を打ってやり、たばこ、酒等ももらっていたが、ここを引き揚げるときには中国兵とトラックに乗る時、住民から尻を叩かれたこともあった。

四月○日、いよいよ引き揚げの時。乗船地までの行軍の途中、露营地で約一週間を費やし、復員船に乗船した。桜の花が見られるかと思ったが、洋上に一カ月もおり、時には七色に変わる富士山を見た夕暮れもあった。

五月十五日、やっと上陸。一週間後部隊解散、浦賀

より乗車、一路故郷に思いを馳せつつ博多駅に着いた。

五月二十二日、ちょうどじき母の命日に故郷に着く。三年十一カ月ぶりに家族と逢い無事を祝した。

戦後補償として、平成七年に赤十字の腕章を送ったのに対して「いぶし銀の花瓶」が贈られてきた。

今後は元氣である限り戦友会で逢うのを楽しみに、また亡くなった戦友諸君の冥福を祈りながらペンを置く。

### 三 南支戦線

#### 死線を越えて

佐賀県 秀 島 貴

「我が大君に召されたる 生命栄えある朝ぼらけ

たたえて送る一億の 歓呼は高く天をつく

いざ征け兵士 日本男児」

小学生の唄う「出征兵士を送る歌」と日の丸の旗の

波に送られ、昭和十八（一九四三）年三月十三日、福岡第四十六連隊に応召入隊、約一カ月の後、門司より輸送船で勇躍祖国を離れ、東シナ海を南下した。

「日の丸の 小旗の波に 送られて

勇躍征途に 吾はつきけり」

「門司港や さらば祖国よ さくら花」

船は無事台湾の高雄港に着く。日本は四月なれど高雄は夏で暑い。

「輸送船 台湾高雄に 日焼の兵」

敵潜水艦の動き活発なれば、警戒の中に高雄港を出発。香港島に一時寄港して珠江の濁流をさかのぼった。

「香港島 沈船あまた 見ゆるかな

激戦のあと 今もとどむる」

虎門要塞辺り、防暑帽に夏衣の兵警備の歩哨に、戦地に来るとの感を覚ゆる。

「防暑帽 夏衣の兵 珍しき」

船は尚も珠江をのぼる。兩岸に支那大陸広々と見え、夕方、黄埔港の岩壁に着く。